

反ナチ少年集団・エーデルヴァイス海賊団

——スタイルと活動を中心に——

竹 中 暉 雄*

はじめに

別の稿（「反ナチ少年集団・エーデルヴァイス海賊団——ヒトラー・ユーゲントとの敵対を中心に——」桃山学院大学『人間科学』第12号，1997年3月予定）において，ヒトラー・ユーゲントを襲うエーデルヴァイス海賊団の活動について論じた。しかしエーデルヴァイス海賊団に代表される諸集団も，最初からヒトラー・ユーゲントを襲撃する目的で生まれたとは限らないのである（そのように判断されて起訴されたハンブルクの集団の事例はあるが）。彼らには，労働から解放された自由な時間に，本来行ないたい活動があった。しかしその自由な活動を妨害されるがゆえに，ヒトラー・ユーゲントを襲ったのである。本稿ではエーデルヴァイス海賊団のスタイル，その本来の活動，そしてヒトラー・ユーゲントと対立を繰り返す過程で生まれてきた，自分たちを束縛するナチ体制そのものに敵対するその他の活動について論究する。なお引用文中の（ ）は原文のまま，〔 〕は筆者による注である。

1. スタイル

エーデルヴァイス海賊団などの少年集団は，どのような恰好をしていたのだろうか。いくつかのナチ当局者の記録を通して頭に描いてみたい。

まだ開戦前の1937年，デュッセルドルフのゲシュタポは，「キッテルバッ

* 本学文学部

キーワード：少年労働者，ナチズム，反抗，歌，ビラ

ハ海賊団と名乗ることを特に好む」少年たちに関して次のように記録している（12月10日）。

彼らは、H J〔ヒトラー・ユーゲント〕とははっきり区別するために、
「たいていは禁止された同盟系ユーゲントの制服に似ているか、あるいはそれから引き継がれた」いわゆる旅行服を着ている。特に好まれているのが、色シャツ（スコッチ風タータンチェック、あるいはスキーシャツとも言われる）、半ズボン、折り返し靴下と長靴、色靴、ネッカチーフ、そして種々の飾りがつけられたベルトである。こうした服装は、同志たちが旅行や他の場所へ行った際に連帯感を抱き、たとえその他では異質であっても、仲良くなるのに役立つ。それから多くの場合、この若者たちは姓は互いにまったく知らず、ただ名前ないしあだ名を知っているのみである。挨拶は、これらの若者が路上で出会ったり、互いによく知り合っていないが同様の服装で仲間だと思ったときには、一般に「アホーイ」〔他の船への呼び掛けの「オーイ」〕と言う。挨拶としては時には、これまでの経験から「ハイル・ヒトラー」の代用と見なされる「ハイデヴィツカ」が使われている^{（史料12）}。

最後に出てくる「ハイル・ヒトラー」と叫びながら「右手」を高く挙げる挨拶は、言うまでもなく当時一般に強要されていたもので、1934年2月に帝国内務省は、「学校の内外」においてこの「ドイツ式」（ヒトラー式）挨拶をするよう、教師と生徒に命じている¹⁾。海賊団員は意識的にこの挨拶を拒否して、別の方式を採用したのである。

1941年6月28日、海賊団の調査を命じられたミュールハイム＝ルール²⁾のヒトラー・ユーゲント調査指導者は、「ざっとした目測」で「およそ50人」の少年・少女たちがメリンクホーフ通りや自動車連絡道路でたむろしているのを見つけた。彼らの一部は「同盟的」な出で立ちをし、ほとんど全員が「エーデルヴァイス」を身につけ、「自分たちはやはりもっと賢くなり、できる限り警察をまんまと出し抜いてやろう」と話していた。6月29日か30日にデュンプテンで教会記念メッセが開かれたが、一見してこの種の少年と分かるの

がウヨウヨし、また「娘たちも多数来ていて、彼女らのほとんど全員がエーデルヴァイスの飾りのついたベルト」を締めていた。7月1日に、もう一度教会記念メッセの広場に行った時には、指導者はさんざん絡まれた。その日、目立ったことは、エーデルヴァイスをつけた少年はほんの少しで、その代わりに色シャツに赤や色とりどりの「毛飾り」をつけていたことであった。証明書を示して、少女もつけていた「毛飾り」を没収した。他の少年少女は錨とエーデルヴァイスをつけていたが、それらは発光メダルらしく、それでこの若者たちもメンバーであることは分かっていたにもかかわらず、没収できなかったという^(史料4)。

1943年のデュッセルドルフ国家警察の報告書によれば、1942年の春に男女少年たちの旅行グループが人目についた。

彼らは、その特にだらしのない服装と態度によって至る所で目立ち、顰蹙を買った。このグループのメンバーは、白ストッキング、革製半ズボン、色つき旅行シャツ、ネッカチーフ、そして目印としてエーデルヴァイスを身につけていた。彼らはワングルにはギターを携え、旅行の歌や同盟的な歌を歌い、テントあるいは農家の納屋で宿泊をした。これら少年たちの全般的な道徳的墮落は、とりわけラインヴィーゼン、ベルクラント峡谷のダム、その他、監視されずに水浴できるような場所において目立った。男女間では、およそエチケットに欠けた社交の作法と形式が支配していた。しばしば、男女の少年が全くの裸で一緒に宿泊したり、水浴したりした。さらに彼らは庭園や田畑で泥棒をした^(史料1)。

この報告書に限らず、ヒトラー・ユーゲント外の少年集団に関するナチ側文書では、彼らと「性的墮落」とを結びつけるものが多い。帝国青少年指導部の内部文書（1942年9月）も同様であり、とりわけ英米のジャズに酔う「スウィング少年」たちの「性的墮落」と「同性愛」を執拗に強調している。言うまでもなくナチ側文書は少年集団を「攻撃する」意図で書かれている。したがってこうした場合、そのことを意識して判断する必要がある。

オーバーハウゼンの元海賊団員は、仲間うちで「そうしょっちゅうではな

い」にしても性交渉があったことを認めているが、「それは特に下層階級では原則的には全く普通のこと」であったという²⁾。しかし1942年4月にミュンヘン高裁長官が、「とりわけ道徳的な領域で若者たちの考え方が緩んできた。ここでもまた特に少女の場合、まさに驚くべきほどである」と、また1943年3月にニュルンベルク高裁長官が「12歳から17歳の少女が以前より慎みが無くなり衝動的になっている」ことを嘆いているように³⁾、そうした状況は一般化していたのであって（ナチの女性観が反映して、女子側ばかりが非難されているが）、たとえナチ側文書が指摘する「性的墮落」が正しかったとしても、特に海賊団だけが墮落集団であったかのように印象づける報告は意図的であったと言えよう。

さらにナチ側がことさらにそうした集団を「性的墮落」と結びつけて攻撃する理由があったことを考慮しておく必要がある。ヒトラー・ユーゲントは男女別の組織に構成されていた。そのために思春期の若者たちにとっては、海賊団やその他自由な集団のほうに魅力があった。フランクフルトの元エーデルヴァイス海賊団員、ヴォルフガング・ブレックハイマーも、「私たちの共同生活の決定的な要因は、疑いもなく、少女と少年とが一緒に旅行に行くという事実であった」と認めている。しかしだからこそファシストたちは、「この男女一緒にの行動を、少年グループを攻撃し可能な限り弾圧する口実に利用した」のであると⁴⁾。

1943年11月7日付のケルン簡易裁判所少年担当裁判官報告は、次のように「エーデルヴァイス海賊団」の外観と活動について描写している。

エーデルヴァイス海賊団が外へ出てくる際の最も単純な姿は、上着の左の襟の表ないし裏にエーデルヴァイスの目印を付けることである（在学中の少年たちが青い「スキー」帽子に付けるエーデルヴァイスの徽章は、こうした帽子の場合、初めからエーデルヴァイスの徽章付きで売られているので、ここでは考慮に入れない）。入手するのが次第に困難になっているエーデルヴァイスの目印以上により好まれ、より広がってきているのが、上着の左の襟の裏の隅に付けられた一本（エーデルヴァイ

ス色)あるいは複数本(エーデルヴァイス、黒、赤、黄)の色つきピンである。複数のピンはたいてい、恐らく特定のグループへの所属を意味しているらしい、ある決まった順序で付けられている。

その他に、小銭入れとか札入れ、あるいは葉書などに色々な形で印されたエーデルヴァイスの目印と並んで、ドクロの目印もしばしば観察された。エーデルヴァイス海賊団の「制服」は、半(革)ズボン(HJズボンも)、白い折り返しソックス、チェックのシャツ、白いセーター、ウインドヤッケ、白いスカーフ、そして長髪である。左のソックスには櫛が、右にはナイフ(たいてい旅行用)が入れられている。少女は白ソックスとともに白セーターあるいは登山ベスト、ウインドヤッケを着ている。ワンゲルの装備には、以上の他に、背囊と楽器がある。こうした装備をして若者たちが、温かくなった季節の土曜・日曜日、とりわけ聖霊降臨祭〔復活祭後の第7日曜〕に、何百人となく、徒歩で、自転車で、あるいは鉄道で戸外へと移動する。週日とか労働中は、彼らはふつう、こうした服装のうち、白スカーフとか白ストッキングといった何か個別のものを身に着けている。そして目印以外のそれらでもって、エーデルヴァイス海賊団であると識別できるのである。

彼らは「会合」と「旅行」とを区別している。一つのグループに所属している若者たちはたいてい毎日、暗くなってから、規則的に会合し、城門に通じる道路や街角にたむろするか、あるいは「小ホール」が自由に使える、ひいきの飲食店を順番に訪れる。こうした会合では、共通の歌が歌われ、旅の経験が語られ、そしてそれぞれがやってのけたと言う犯罪行為についての報告がなされる。土曜から日曜にかけて、あるいは日曜日に、ふつう少女を伴って行なわれる「旅行」では、特定の場所が好まれた。ケルンでは、アルテンブルク地方、マリエンハイデ〔ケルンの東北東40キロ〕、フェルゼンインゼル、そしてジーベンゲビルゲ山中〔ボン近郊〕のメルヒェン湖などがそれである。彼らははっきりとした独自の「歌」をもっており、その一部は同盟系ユーゲントにまで遡る。

これら同盟系の歌は、どこかで耳にしたか、あるいは現在は国防軍にいる年長の兄や友人から伝えられたものである。それと並んで大量のロシア民謡、ステップ地方の歌曲や、ロシアの風俗と関係するものが目立つ。こうした歌曲が紙に書かれて広がることは稀であって、たいていは口頭で伝えられている。さらに注目すべき特徴は、自分で選んだ別名あるいはあだ名で呼んだり区別したりする習慣である^(史料13)。

以上のように、海賊団の外見を特徴づけるものは特有の服装であり、身につけるシンボル（目印）であった。長髪も彼らのスタイルの一つであった。ライブチヒの「モイテン」という同様の集団に関してであるが、「この少年たちのことをその統一的な衣服のために国家ユーゲント〔ヒトラー・ユーゲント〕の団員だと思ったメッセ見物の外国人」からも苦情が当局に寄せられたと、帝国青少年指導部の秘密文書は述べている^(史料10)。

特定の服装や目印は自己主張の方法である。プロテスタント帝国監督ミュラーは、1933年12月19日、系列少年団体のヒトラー・ユーゲントへの統合に合意した⁵⁾。しかし一部の若者は、こっそりと自分の内面を仲間だけに知らせたくて目立たない目印をつけたことを、プロテスタント系少年団体の女性指導者が語っている⁶⁾。

〔早くも1934年には私たち青少年グループのH Jへの強制編入が行なわれ、私たちのグループはヘッセンにおいても真っ先に解散させられた〕私たちの記章も制服も、グループに属するなにもかもが禁止された。私たちには昔の同志だったことを見分ける何かの目印を持ちたくて、どこでも七十五ペニヒで買える小さな黄色い鉛筆のついた小さな緑色のポケット版カレンダーをそれに当てた。私たちは皆が、電車の中でも、その他どこでも、この小さな緑のカレンダーを持ち運び、その後、何年も後まで、それぞれお互いを認め合った。それは本当の小さな秘密の目印であった。

しかしエーデルヴァイス海賊団の場合は、見つかって弾圧を受けることを前提にして、あえてわざわざ目立った服装をし目印を付けた「確信犯」であっ

た。

2. ハイキング・旅行

海賊団の活動の特徴づけたものは、中にはライト（デュッセルドルフの西南西20キロ）のエーデルヴァイス海賊団のように「チェスクラブ」の形をとって仲間を集めたというゲシュタポ報告（1943年5月27日）もあるが⁷⁾、何といてもまず第一に禁を犯してのハイキングや旅行であった。1933年6月17日にヒトラーによって「ドイツ帝国青少年指導者」に任命されたバルドゥーア・フォン・シーラッハは、6月22日には、いわゆる同盟系ユーゲントの多くが加盟する「大ドイツ同盟」の解散と、それ以外のドイツ義勇団やドイツボーイスカウト同盟などの活動停止を6月17日付で指令した⁸⁾。そしてその後、ヒトラー・ユーゲント外でのハイキングや旅行は禁止され、さらに先に述べた制服様の服装やバッジ、そして歌に至るまでも、「同盟的」活動として禁止されていたのである。宗派的ユーゲントに対しても同様であり、1935年7月23日には親衛隊帝国指導者のヒムラーは、制服やP X (Pax Christi) などのバッジの着用、公の場での行進・ハイキング・キャンプ、音楽隊、のぼり・旗・ペナントなどの禁止を、各宗派の少年団体に対し命じた⁹⁾。

しかも同様の命令は、ヒトラー・ユーゲント内の組織であるD J（ドイツ年少団）に対してさえも出されている。H J ベルリン地区指導者のアクスマン（1940年に帝国青少年指導者）は「特別命令」で、中央アジアで用いられる円形テントである「ユルタ」などの使用を禁止するとともに、D J 団員の上着の「黒ボタン」（「輝く」ものに限り許可）、旧同盟系グループなどの制服、「半ズボンに大きなチェック柄のスコットランド風シャツ」、ギュンター・ヴォルフ出版社〔旧同盟系〕の印刷物・歌集なども禁止した。「1935年11月15日以降、禁止された制服の一部を着用していて発見された者、あるいは上記の印刷物を所有している者は、ゲシュタポに引き渡される」と¹⁰⁾。D J が特に対象とされているのは、その前身が1933年以前に同盟系の指導者によって創設され、同盟的団体禁止以降、彼らはヒトラー・ユーゲントではなく

D J のほうに所属して指導力を発揮していたからであった。

さて当時16歳のデュッセルドルフの電気溶接工、ヨゼフ・M（海賊団員として補導された）の供述書（1942年12月15日）によると、このような状況の中で、しかも戦時中でありながら、彼は実によく旅行に行っている。すでに約10回ほど旅行をしたというのである。遠いところではウィーンへ1回、ミュンヘンへ2回、アルテンベルク（ドレスデンの南30キロ）へ3回である。

最初の旅行は1940年7月のウィーン行きで、この時は一人で往復ともヒッチハイクをし3週間かかった。4回目は1941年4月のシュロス・ブルク行きで、その際には旅行少年の6人と知り合いになった。その時にヴェルメルスキルヒェン（デュッセルドルフの東南）の保護警察によって拘留され、そのうえデュッセルドルフ国家警察の訓戒を受けた。この旅行で初めて、旅行服、つまり半ズボン、白ストッキング、短靴、登山ベスト、チェック柄シャツを着用した。1942年10月にアルテンベルクへ行った最後の旅行では、H J のパトロール隊によって拘留された。この旅行の際にアルテンベルクで、ケルンからのグループと出会った。20人から25人のグループで、全員ケルンのフォルクス庭園で交流していたという。

「このグループには、もう思い出せませんが、ある名前がありました。指導者は大きく強そうな若者で、濃いブロンドの髪でした。少年たちは、みんな黒シャツを来ていました。グループは『ナヴァホ』という名前だったと思います。ケルンの少年たちは、パトロール隊が来た時にはズラかっていたので、記録には残っていません」^(史料11)。

ここに出てくるケルンの「ナヴァホ」というのは、エーデルヴァイス海賊団と同様の集団のことである。ヨゼフ・Mは「私たちは旅行で偶然に他の旅行グループに出会うことができました。でも決して打ち合わせたものではありません」とわざわざ強調しているが、旅行先で出会った海賊団同士が話し合ったことは認めている。特有の服装をしていれば、その機会はより掴みやすかったであろう。

1942年4月4日、オーバーハウゼン（デュッセルドルフの北30キロ）では、

K P (キッテルバッハ海賊団) ないし E P (エーデルヴァイス海賊団) と呼ばれ、ドクロの指輪とエーデルヴァイスの目印をつける25名の少年たちが起訴された。罪名は、1933年2月28日「民族と国家の保護に関する大統領令」執行のために発令された、親衛隊帝国指導者兼国家警察長官による「同盟的ユーゲント禁止令」(1939年6月20日) 違反である。起訴状は、例えば S t の場合、「そのための服装をして」少し大きな旅行のすべて、特に1941年のイースターの際のドラッヒェンフェルス(ボンの南東15キロ) への旅行、ラーティンゲン(デュッセルドルフ近郊) の〈青い湖〉への旅行、ハルテルン(デュッセルドルフの北北東60キロ) やグラーフエンミューレへの旅行に参加したこと、van H の場合も、ドラッヒェンフェルスやハルテルンへの旅行に参加し、さらに被告人 S z と共にリューネブルク荒野のヴァルスローデ(リューネブルクの南西70キロ) へも旅行したことを、犯罪事実の一つに挙げている^(史料14)。

フランクフルトの元エーデルヴァイス海賊団員 W・ブレックハイマーは、夏の週末には多くの仲間と市北部のタウヌス山中へキャンプに行った。1942年、16歳頃のことである。

キャンプの帰りには始発駅クロンベルクの「郵便亭」によく集まった。すでに来ていた者は盛り上がり彼らの歌を歌っていた。彼のグループもすぐに加わった。そこで彼は初めて、200人ほどが多くのギターの伴奏で、「公式の歌にはない歌」を歌うのを聞いた。歌っている途中で突然、タバコの箱がテーブルからテーブルへと投げられた。それはヒトラー・ユーゲントのパトロール隊がやってきたことを知らせる合図だった¹¹⁾。

1944年11月10日、ケルンのエーデルヴァイス海賊団の一員として16歳で処刑されたシンク少年の姉(妹)、カロリーネ・バンテンも、「すべてはギター演奏と旅行から始まったのです」と回想している¹²⁾。

3. 歌

エーデルヴァイス海賊団に限らず、旅行やハイキングには歌がつきもので

ある。ヒトラー・ユーゲントにおいてもそうであった。ただしどういう歌を歌うかが問題である。

グループの夕べやワンゲル旅行をする場合など、さまざまな機会に歌われた歌の内容が、海賊団の心情を端的に表現している。多くの場合、禁止された同盟系ユーゲントに由来する歌詞の一部を変えたものが歌われたが、中にはまったく新しく作られたものもあった。そしてそうすることで、ナチズムやヒトラー・ユーゲントに敵対する気持ちを表現したのである。海賊団など諸集団の名称、例えば「ナヴァホ」（北米インディアンの部族名）「テキサス・クラブ」「ハーレム・クラブ」「カメルーン人クラブ」「チャーリー一味」など、また彼らが使った別名（旅行名）、例えば「ジョニー」「テキサス・ジャック」「アラスカ・ビル」「ウイスキー・ビル」「スターリン」など、そして歌詞の中にいろいろ織り込まれている「ヴォルガ河」「バイカル湖」「ウラル山脈」「カズベク山」「コサック」「コルチャーク」（帝政ロシアの提督）「キャバレロ」「タンピコ」など外国語や外国の地名・人名などは、「スウィング」が流行したこととともに、ナチズムの公式スローガン「民族共同体」が、彼ら若者たちにとって何の魅力ももたなかったことの証であり、むしろそれに対する積極的な挑戦であったといえよう。

実際にどのような歌詞の歌が好まれたのか。ナチズム下の海賊団のカウンター・カルチャーを知るうえで、極めて重要な手がかりである。まずは「海賊団」らしく航海に関する歌であるが、これはケルンの海賊団員の供述によるものである。

ハンブルクにサイレンが鳴り始めると、
我らは再び乗船だ。
酒場に座る小さな娘、
巨大な世界の夢を見る。
リオ・デ・ジャネイロ、アホーイ、キャバレロ〔旦那〕、
ハンブルク娘は貞節なのさ。

（エーデルヴァイス海賊団は誠実なのさ）^{（史料15）}

「向こう岸の我らの小舟を曳け」という歌のリフレインは、ヴッパータール（デュッセルドルフの東30キロ）では改作されて、「エーデルヴァイス海賊団、アホーイ、キャバレロ、我らは叫ぶ、タンピコ〔メキシコの港町〕、アホーイ」^(史料16) となった。ヴッパータールの海賊団のもう一つの「闘争歌」の中の「ヴッパータールの荒くれ職人^{ゲゼレ}、シーラッハの殺し屋に追いかけられ」という歌詞は、なんとヒトラー・ユーゲントの総元締めである帝国青少年指導者シーラッハの名を織り込んでいる¹³⁾ ^(史料28)。

デュイスブルク（デュッセルドルフの北22キロ）のグループはローカル色を出すために、彼らのハイキングの目的地の一つであった「カモ猟用地」を織り込んで、「カモ猟用地のうえ暑く、太陽は真っ赤に燃え上がる。我らのエーデルヴァイス海賊団は、自分たちの歌を歌う」と歌った^(史料17)。

クレフェルト（デュッセルドルフの北）のグループが1942/43年ころに歌っていた次の事例は、よりはっきりと反ナチ色を濃く打ち出している。指導者のヘルムート・G自身が起草しアレンジしたという^(史料18)。ドクロ印は一般に海賊団のシンボルであったが、武装親衛隊の中にも、強制収容所護衛の「ドクロ部隊」が存在した。

ドクロ・エーデルヴァイス海賊団の歌

ハイル、我が愛しの人よ、
空が白み始め、鼓手が太鼓を打っている。
突撃部隊まで届けよと、
太鼓は大きな音で響きわたる。
眠れる者よ、みな目覚めよ、
静かな小路で眠る者も。
いまこそ生きよ、汝、美しき乙女、
汝のもとを去らねばならぬから。
エーデルヴァイスを身に付けて、

死ぬまで常に誠実でいるから。

白い戦場で、
我らはハーケンクロイツを打ち砕く。
エーデルヴァイスは、朝日とともに、
突撃部隊のために、
蒼穹まで高く上昇す。

ラインのエーデルヴァイスをつけた娘は、
誠実と誇りのしるし。
待っていてくれ、我ら、故郷に再び戻るまで、
エーデルヴァイスの男たちが帰るまで。

いつか嵐が押し寄せたとしても、
我らみんなの一撃で、
ドイツの土地は永遠に、
よそ者の泥棒から自由となる。
ドイツの娘はブロンドと褐色、
お前の金色巻き毛は、もう、
ナチの誰にも見せてはならぬ。
平和の鐘が鳴り響く時、
我らは誇らしげに、エーデルヴァイスと共に。

我が愛する愛しの人よ、
私のためにバラを手折ってほしい。
私が敵の前に横たわり、
もう話せなくなった時には。
死の戦慄の中にいる、私のことを思ってくれ。

反ナチ少年集団・エーデルヴァイス海賊団

たとえ銃弾が飛んで、
私が英雄の死を遂げるとしても、
エーデルヴァイスは勝利する。

次の歌は、ルール地方で広まっていたことを1943年3月15日付の帝国保安本部（RSHA）の報告書（1943年3月15日）^{（史料19）} その他が認めているものであるが、ナチに対する憎悪の気持ちがいままでの歌以上に露骨に表現されている。

国境にはエーデルヴァイスの一群が、
ナチの危険と闘う自由の戦士がいる。
エーデルヴァイスは、昼も夜も風に揺れ、
闘いの声が響きわたる時、エーデルヴァイスは力をのばす。

* * *

そして大通りの排水溝には、万歳、パトロール隊が横たわり、
我らエーデルヴァイス海賊団の出発を、
苦しそうに、悲しげに見つめている。

* * *

ラインとルールのはとりに我らは進軍し、
自由のために我らは闘う。
パトロール隊を真っ二つに打ち砕き、
エーデルヴァイスは進軍す。さあ、道を空けてくれ。

* * *

マイスターよ、我らに合格証をおくれ、
マイスターよ、我らにお金をおくれ。
それはこの世の骨折り仕事より、
女のほうがもっと大事だから。

* * *

我がエーデルヴァイス海賊団の陣地は、
オーストリアの山中だ。
一人くらいは我らのところへ、
山を登ってくるべきだ。
そうすりゃ我らは殴り倒す、
ゲシュタポでもパトロール隊でも。
我がエーデルヴァイス海賊団は、
卑劣な策略など知らないから。

* * *

白熊よ、聞いてくれ、我らがこれから言うことを。
我らの故郷にもはや自由はない。
昔のように、棍棒を振り回し、
H J と S S [親衛隊] の頭を2つにぶち割ってくれ。

デュッセルドルフでは最後の「白熊」のフレーズは、「白熊よ、聞いてくれ、我らがお前に訴えることを。お前の若者は、もはや自由ではない。昔のように、格闘リングを振り回し、我ら同盟ユーゲントをもう一度自由にしておくれ!」と歌われ^(史料20)、ウッパートールでは「白熊」が「リュエデツァール」(伝説の山の精)に変えられて次のようになった。「バルドゥーア」は言うまでもなく、バルドゥーア・フォン・シーラッハのことである。

リュエデツァールよ、聞いてくれ、我らがお前に言うことを。
人々や故郷に、自由はもはやない。
太古の昔のように棍棒をとって、
バルドゥーアの集団を2つにぶち割ってくれ¹⁴⁾。

ケルン高裁の検事長は、エーデルヴァイス海賊団やドクロ海賊団が歌う歌は「同盟系歌曲(一部は、アジアの民族性・英雄性を賞賛するステップ地方民謡)」「H J を敵視する歌」「そのほとんどは自作の歌曲集で普及している同盟系歌曲を改作したもの」「映画のヒットソング」であると司法省へ報告

し、さらに次のように、歌に現れた海賊団の敵対性について説明している(1944年1月16日)。

彼らの会合の間では音楽が演奏され、歌われる。歌を伝えるには、「あるグループから他のグループへと火花が飛びさえすれば良い」。歌の中には何度も何度も、「H J」での活動など少しも楽しくなくなった。なぜなら現役の指導者は国防軍に召集されていなくなり、その代理の指導者はたいてい同年代で、活動を興味深く引きつけるようにすることができないからである」といった挿入文句が出てくる。まともな少年たちを政治づかせ、彼らの間で広まりつつある「H J」への無関心さを「H J」に対する敵対的態度」にまで高めようとするには、中心的な非社会的分子の感化さえあれば簡単であった。こうした敵対の姿勢は彼らの歌に現れているが、その他にH Jハイム襲撃のために折りに触れて作られた取り決めとか、実際に発生したH Jパトロール隊襲撃、H J団員への嫌がらせ、その他にも現れている(史料2)。

最近起こった犯罪行為で確認されたとケルンの検事長がいう歌には、次のようなものがあつた。

歌曲 I

ユンカーの酒場には、ワインとパイプがあり、
我らは集って座っていた。
モルツとホップのけっこうな一雫、
悪魔が我らを指導する。
ワイ、若者が歌い、ギターが響くところ、
娘も合わせて歌い出す。
ヒトラーのこの世の中が、我らに何をくれようか、
我らは同盟的に生きたいだけ。
ワイ、旅行ナイフがひらめくところ、
ヒトラー・ユーゲントが吹っ飛んで、

そしてナヴァホが力をのばす。

(あるいは： レヴォルバーが火を吹いて、
ギターが響き、ナヴァホが歌うとき、
娘も合わせて歌い出す)

ヒトラーのこの世の中が、与える何かをもっていようか、
我らは同盟的に生きたいだけ。

(または： 我らはヒトラーから自由に生きたいだけ)

歌曲II

ハンブルクにサイレンが鳴り始めると、
ナヴァホは乗船せにゃならぬ。
娘一人の酒場では、我らの別れもつらくはないさ。
リオ・デ・ジャネイロ、アホーイ、キャバレロ〔旦那〕、
エーデルヴァイス海賊団は誠実なのさ。

歌曲III

ヒトラーの圧政が、我らを小さく分断し、
我らは未だに鎖の中だ。
だが我らはもう一度、いつか自由になるだろう。
必ず鎖を断ち切るぞ。
我らのこぶしは、堅いんだ。
そうだ、ナイフも抜かれてる。
若者たちの自由のために、我らナヴァホは闘うのだ。

歌曲IV

ケルンでは、多くの人が戦死をし、
ケルンでは、多くの人がその場にいた。

エーデルヴァイス海賊団もなお倒れ、
同盟ユーゲントは自由になる^(史料2)。

デュッセルドルフの電気溶接工（16歳）Mは、東公園で歌った歌の題名「何がなんでも放浪したい」「放浪青年は自由で独身」「おいらは愉快で若い色男」「ワーイ、見よ、白い大波が」「高い樅の木ーリフレイン：ネッカチーフを昔のように振れ、再びキッテルバッハ海賊団を自由に羽ばたかせよ」などを供述しているが、その後で「ワーイ、見よ、白い大波が、赤い炎を消し去るのを」の終わりのリフレインは、「我らは姿を隠さにゃならぬ、ゲシュタポとその手先から。こっそり勧誘できるだけ」であったとつけ加えている（1942年12月8日）^(史料11)。これはその歌詞から窺われるように、もともとはロシアの反革命白色近衛義勇兵を賛美するものであったが、それが改作されて反ナチの内容に変えられているのである。

同じくデュッセルドルフの走り使いのE（16歳）は警察の事情聴取（1943年1月16日）で、「店では歌も歌いました。旅行の歌が歌われたかどうかは、毎晩店に来たわけではないので、言えません」といったん供述しながら、後で「訂正しなければなりません。もし前に、グループが歌った歌のことを知らないと言ったとすれば、それは必ずしも事実だとは言えません。私はいろいろな歌の出だしは知っていますが、歌詞全部は知りません。私は歌えませんでしたので、一緒に歌ったことはありません。グループでは、次のような歌が歌われました」と供述を変えている^(史料21)。取調室でどのようなやり取りがあったかを彷彿させる生々しい資料である。そして彼が述べた題名は、「我らは通りと小路の海賊団」「ランチョ〔小屋〕の上に黄金の太陽は輝く」「戦いは始まった」「船上のアコーディオンが鳴り始める時」「見よ、白い大波が」などであった。

オーバーハウゼンの元海賊団員Oも、エーデルヴァイス海賊団の「政治的基本姿勢」はその歌に明白であると述べている。例えば「我らは同盟系ユーゲント、他の同盟系ユーゲントはもう存在しない、古いものは死んでしまっ

たし、それ以外は解散してしまった」といったことが、常に出てきたのである。また「黄金の夢の翼にのって」というヒットソングは、海賊団では「ジプシーのバンジョーにのって」といった。「山のうえ空高く」という歌の第2節は、海賊団バージョンでは「鉄格子の後ろでは」となり、リフレインは「私はエーデルヴァイス海賊団にいたので」「我らはヒトラーから自由になりたい」と変えられた。カモ猟用地周辺は、エーデルヴァイス海賊団の主要なハイキング地であったので、「アフリカの大地のうえ暑く」という歌は「カモ猟用地のうえ暑く」と歌った¹⁵⁾。

さらに元海賊団員が言うには、確かに「大きな政治的自覚」があったとは思われないが、しかし「ナチ党に敵対するという何と言っても全く間違えようのない共通の基本姿勢」が存在し、「エーデルヴァイス海賊団の場合の反ナチという対抗観念は、まったく人を教育し形成する力を持っていた」のであった¹⁶⁾。

仲間内だけの旅行や会合だけではなく、人前でのデモンストレーションで歌が歌われることもあった。1943年10月6日、デュイスブルクのエーデルヴァイス海賊団の1グループが、駅構内でコンサートを開いた。しかし帝国労働奉仕団（RAD）に入隊する息子を見送りにきたあるナチ主義者には、それは腹立たしい限りであり、すぐにナチ党管区指導部に訴えるのであった（次ページ参照）^{（史料17）}。

以上のような歌詞において注目すべき点は、海賊団が自分たちを「同盟ユーゲント」として位置づけている、あるいはそう自称していることである。このことをめぐる問題については別の稿に回すことにして、ここではさらに海賊団のその他の活動について見ていくことにする。

ナチ党デュイスブルク管区指導部から
デュイスブルク・ゲシュタポ支所への報告書

——1943年10月8日付——

エーデルヴァイス海賊団の件／小管区指導者・党員・Wilh. K.
(……) の通報

上記の者が今月の6日、RADへの召集を受け取った彼の息子をデュイスブルク＝ハンボン駅へ連れて行った。マテナ通りから駅までの往路で、彼はあまり良い印象を受けなかった数名の若者に出会った。駅に到着すると、出頭するRAD召集者たちは防空避難所に入ったが、それは11時30分頃であった。避難所の前に数人が立っていた。それからしばらくすると、10人ほどの少年がギター伴奏の音楽会をやり始め、その際に若干の歌、とりわけ「カモ猟用地のうえ暑く、太陽は真っ赤に燃え上がる。我らのエーデルヴァイス海賊団は、自分たちの歌を歌う……」と……「優しいマハラジャ、黒いマハラジャ、僕らは君に忠実であり続ける……」とが歌われた。

彼らが入場券を買った後に、党員Kは身元確認のために刑事警察を呼んだ。14時15分に輸送列車は動き出したが、その後少年たちはもう一度歌を歌った。

それから、その間に到着したミュールハイム＝ルール刑事警察署の警部補 Br. が、改札口の前で彼らの名前を確認した。

(以下、名前が続く)

4. ビラ・落書き・演説

海賊団同士の間で連絡が取り合われていたことは、ナチ側文書がいろいろ認めている。またH Jパトロール隊が1942年10月13日、デュッセルドルフ東公園で行なった手入れの際の押収品に1通の野戦郵便物があつたところから、「単に市内の個々のグループとだけではなく、すでに徴兵された以前のメンバーとの間でも連絡がとられ、相互に絶えず文通をし励まし合っていること」が判明したという^(史料22)。

オーバーハウゼンの元海賊団員は、アメリカ兵がオーバーハウゼンに進軍してきた際に、鉱山労働者が掲げた白旗を他の人々が「愚かにも」引き下ろそうとした時のことを取り上げ、次のように述べている。「その時、5、6人のグループに分かれてそこにいた、いくつかのエーデルヴァイス海賊団が一緒になって非常に素早く、誰も無謀なことをしないように取り計らったのでした。同じようなことは絶えずあり、エーデルヴァイス海賊団は戦うことにかけては本当に断固としていたのです」⁽¹⁷⁾。これは、海賊団が闘っていたのがH Jだけではなかったことがよく分かる事例である。

印刷物を作るということはいろいろな場面で証拠を残すことなので、反ナチ的な歌を歌うこと以上に危険を伴う活動である。けれども海賊団はそういう活動も行なっていた。1941年にオーバーハウゼンのH Jハイムの郵便箱で見つかったビラがあるが、それはH Jのことを次のように嘲笑している。最後の「K P」とは、キッテルバッハ海賊団の意味であろう^(史料23)。

15歳や16歳の者がなぜまだ年少団にいるんだ？⁽¹⁸⁾ 彼らはヒトラー・ユーゲント所属のはずだ。サボリたがりたちは、田舎での長期休暇で農民たちの援助をしたくないんだ。そんなことは、14歳の少女や、70や75歳の年老いたお爺ちゃん・お婆ちゃんに彼らは任せたのだ。この若僧たちは休暇中の暇を持て余している。でも労働はしたくない。それなら、労働を学ばせるために、彼らを田舎へ送れ。

ハイル・ヒトラー

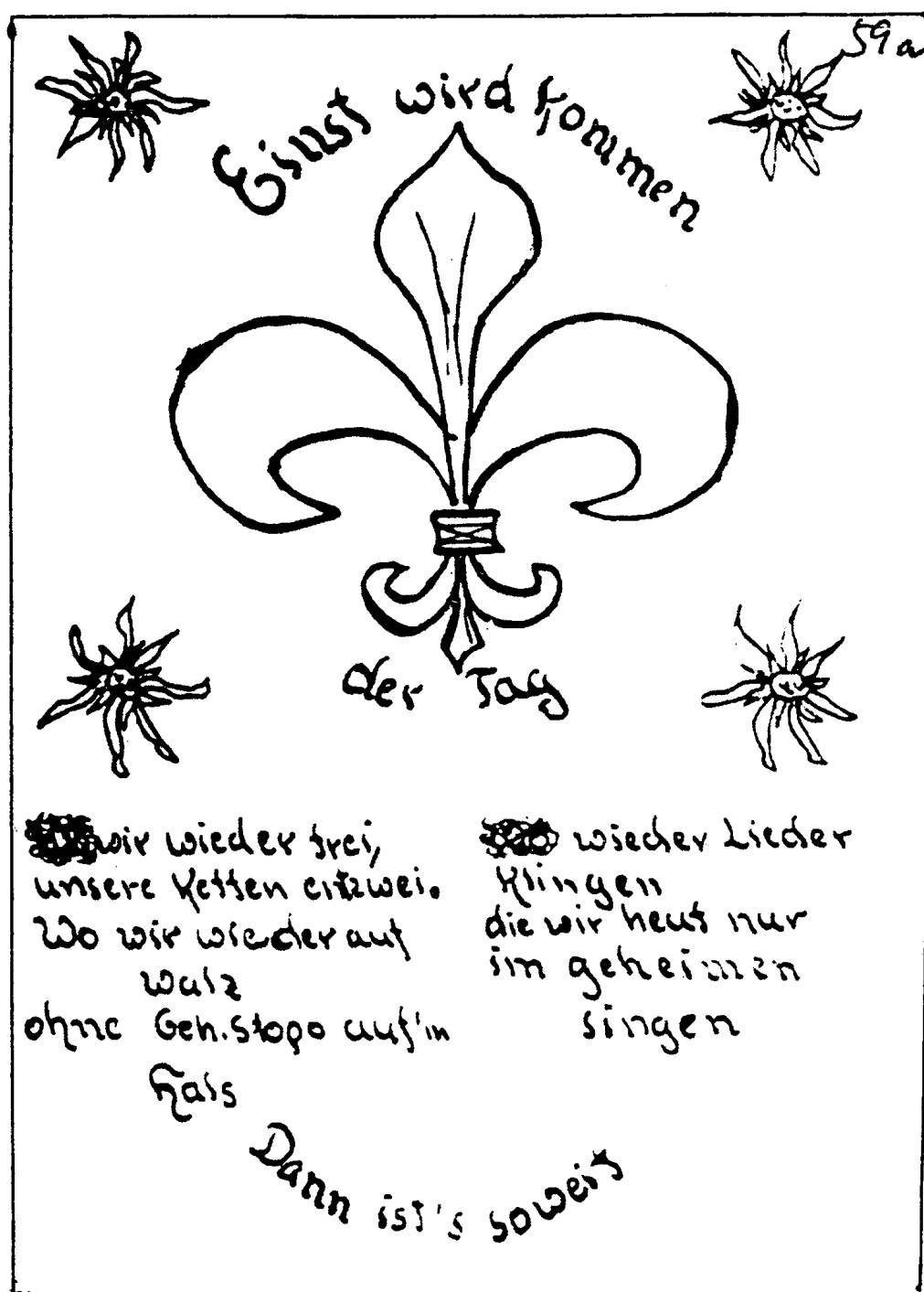
(K. P.)

1942年のケルンのあるエーデルヴァイス海賊団グループの場合、「夜陰に乗じて家屋に落書きをし印刷ビラを配布するため、落書きと糊の分隊に分かれて行動した」と、検事長が報告している。ビラには、「同盟系ユーゲントの活動週間。1-3地区 帰って来い！ 若者よ、目覚め！」と印刷してあった^(史料2)。

ヴッパータールのあるグループが1942年の秋まで、数枚のビラを配布していたことが、デュッセルドルフ・ゲシュタポ文書から分かっている^(史料24)。ヴッパータールの海賊団は、大人たちより大胆に行動した。彼らはナチズムのポスターを引きちぎり、ナチ党のショウケースを打ち壊し、党小管区の建物にまで踏み込んで、彼らのマーク、つまりEP（エーデルヴァイス海賊団）やBJ（同盟的ユーゲント）などを落書きし、ヒトラー・ユーゲントとの衝突に際しては銃器も使った。「暗くなり始めると、彼らの秘密の生活が始まる。口笛や〈アホーイ！〉あるいは〈タンピコ・アホーイ！〉という呼びかけで示し合わせ、腕を組み叫びながら通りを行進し、森や懸垂式モノレールの通路やオーバーバルメンの駅やバルメン緑地で会合を持つ」のであった¹⁹⁾。

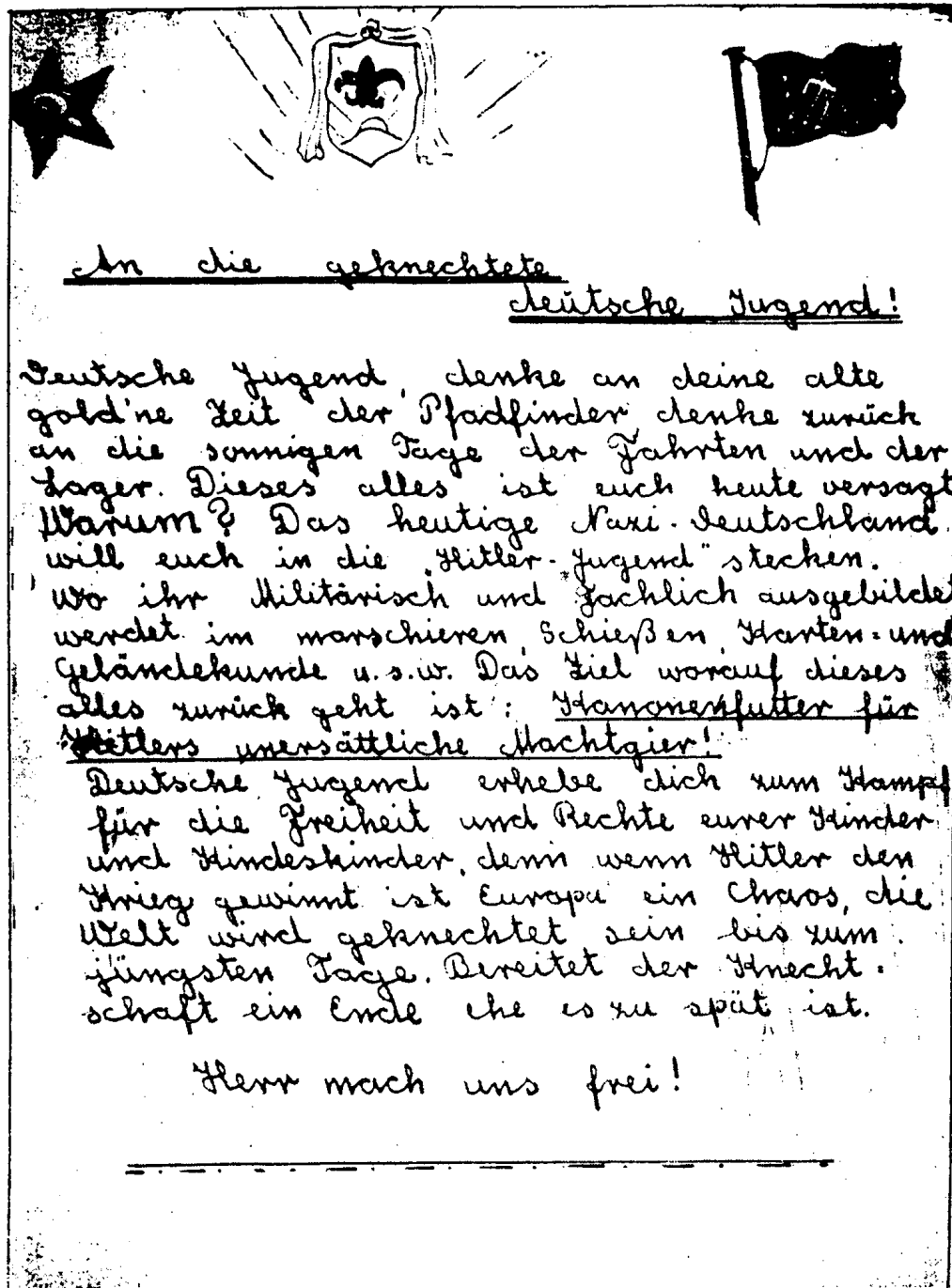
1943年7月17日、ナチ党デュッセルドルフ＝グラーフエンブルク小管区の指導者が「エーデルヴァイス海賊団」の件でゲシュタポ・デュッセルドルフに訴えていることによれば、特に最近のデュッセルドルフ大空襲以後、東公園での少年たちの集会在以前よりも目につくようになり、12～17歳のこれら少年が夜遅くまで楽器と少女たちを伴って「ガラガラと徘徊」しているが、彼らがアルテンベルク通り沿いのガードの壁に「ヒトラーを倒せ」「OKW〔国防軍最高司令部〕は嘘つきだ」「大量殺戮のための勲章」「ナチの畜生を倒せ」その他の落書きをしたのではないかとの「嫌疑」がかかっているという。この落書きは、消したとしても「2、3日の内にはまた新しく書かれてしまう」のであった^(史料25)。

次の2枚のビラはデュッセルドルフのゲシュタポ文書所収のものであるが^(史料26)、最初のビラにはエーデルヴァイスが図案化されて使われている。



その日はいつかやって来る。僕らの鎖が断ち切られ、僕らが再び自由になる。ゲシュタポなんか気にせずに、もう一度みんなで旅に出て、今では隠れてしか歌えない、歌が再び響きわたる。そういう日がやって来る。そうなりゃ、それで、めでたしだ。

出典：Peukert, *Edelweißpiraten*, S.80.



奴隷となったドイツの若者へ!

ドイツの若者よ、ボーイスカウトの古き黄金の時代のことを思え。旅行とキャンプの太陽がいっぱいの日々を追想せよ。これらすべてが今や、君たちには拒否されている。なぜか? 今日のナチス・ドイツが、君たちをヒトラー・ユーゲントに押し込もうとしているからだ。そこでは君らは行進や射撃、地図・地形学など、軍隊的にそして専門的に訓練されるのだ。これらすべてがけっきょく狙っているのは、ヒトラーの飽くことなき権力欲のための弾丸の餌食を造ることだ! ドイツの若者よ、君たちの子どもと孫たちの自由と権利のため

の戦いに立ち上がれ。なぜならば、もしヒトラーが戦争に勝てば、ヨーロッパは無秩序となり、世界は最後の審判の日まで奴隷化されるだろうからである。遅くなり過ぎないうちに、奴隷状態に終止符を打とう。

主よ、我らに自由を！

出典：Peukert, *Edelweißpiraten*, S.81.

歌とビラの次は人前での演説の事例である。エッセンのある徒弟は、旅行についての「古き良き時代」を懐かしむ皮肉な演説を行なったのである。

商業徒弟のゲルハルト・ヴァン・D（20歳）に対する国家警察エッセン署の告訴状（1935年1月23日）によれば、1935年1月20日の午後、「ツィゴイナー」（いわゆるジプシーのこと）という別名を持つ「キッテルバッハ海賊団の一員」が、ミルクホールに集めた種々の団体のメンバーの面前で、特に「労働奉仕義務と農村援助」に関して「悪意ある演説」を行なった。さらに彼は「公然とキッテルバッハ海賊団員であることを表明したそうである」（傍点筆者）。これは1934年12月20日「国家と党に対する悪意ある攻撃に関する法律」第2条違反である。

演説内容の写しを見る限りでは、かなり攻撃的ではあるが「労働奉仕義務と農村援助」のことなど少しも触れていないし、また「キッテルバッハ海賊団員」であることの表明などもなされていない。それにしても演説内容の記録が残されていること、「事件の証人」としてミルクホール居住の「ミルク運搬人」の名前があげてあることが、時代状況をよく物語っている。

古き良き時代！（要旨）

私は旅行仲間のすべてに、良き時代は消えてしまったと言いたい。若者気質は忘れ去られ、今日いったい誰がまだ旅行に行っているだろうか。至るところ、ユースホテルにおいてさえ、別の雰囲気支配的となり、正直に言えば、もううんざりだ。……今日、恐ろしい行為のことが話題となると、すぐにキッテルスバッハ海賊団のことが思われるが、でも同

盟は、ちょっと前には、そのメンバーに対し最高の喜びを与えることができたのだ。祖父は孫たちに、父親は子どもたちに、ボーイスカウトの素晴らしい時代について話す。……今では同盟はすべて禁止されてしまい、「他の書類とともに」[ad acta]、死滅するまで忘れ去られてしまった。

〔今では少しぶらぶら歩けば、すぐに番小屋から警備兵が出てきて、引っ捕らえられてしまう〕もし旅行ナイフを持っているのなら、家に置いておきたまえ。そのほうが本当に良い。というのは、もしそんなブツが見つければ、本当に体中傷だらけにされるだろうから。笑い事ではなく、むしろ悲しむべきことだ。旅行ナイフなど、なんとHJのちび団員には許されているんだから。

……若者であることを示そうと思うとビンタを受ける。私の場合そうだったし、私は一発食らわたのだ。だが私たちの楽しみを絶対に駄目になどさせない。私たちは若い。私たちは人生を楽しむつもりだし、一方の人々の邪魔をし串刺しにしたい。でも私はそんな人間ではない。私は、旅仲間の「ツィゴイナー」であり、いつまでもそうだ。私は例の流儀に忠実であり続け、いつも若者の旅行に出かける。そのうえ私は楽道家であり、生涯、どんなサロンのファシストにもならない。そのように他の年寄りもみんな思ってくれるといいのに。

エッセン警察からゲシュタポ・ベルリンおよび国家警察デュッセルドルフ本部にあてた報告書（1935年2月19日）は、この徒弟は2月19日から7日間の保護拘束を受けると述べている。しかし文書の末尾に「裁判官は、拘束命令発せずと間違った判断をした」とあることからすれば、このようなことを理由にした拘束に反対であった裁判官も、けっきょく警察の圧力に負けたということが分かるのである^{（史料27）}。

本稿で紹介したような海賊団自身による歌詞やビラ、落書きなどの証拠が、もしナチ側文書の中に残されていなかったとすれば、海賊団が単なる「不良少年」ないし「愚連隊」として片づけられてしまうことは、極めて容易となっ

たであろう。

以上、本稿では、ヒトラー・ユーゲント団員たちにとって大きな恐怖の存在であったエーデルヴァイス海賊団の、スタイルおよび旅行・歌・ビラ配布・落書きといった諸活動の内容を検討した。ヒトラー・ユーゲント以外でのそうした行為自体が「同盟的活動」として禁止されており、そういう活動を行なうことが直ちに違法行為となったのであるが、より重要なことは、歌やビラに盛り込まれた反ナチ的なメッセージである。その中には、ナチズムが掲げる「民族共同体」という理念をあざ笑うかのように、アジア、ロシア、アメリカ、メキシコや「ジプシー」の諸観念が意識的に取り入れられ、さらにヒトラーやナチ体制自体をより積極的に攻撃する内容のものも含まれていた。

なお、エーデルヴァイス海賊団員の「正体」、ヒトラー・ユーゲントの中の「隠れ海賊団員」の存在、入団動機、他の団体との関係、ナチ当局による海賊団現象の分析と対策、少年強制労働収容所の設置、職場での軋轢、ケルン＝エーレンフェルトでのパルチザン活動、シンク事件などについては、別稿で扱う予定である。

注

- 1) Karl Heinz Jahnke & Michael Buddrus, *Deutsche Jugend 1933-1945, Eine Dokumentation*, VSA-Verlag, 1989, S.84.
- 2) Detlev Peukert, *Die Edelweißpiraten-Protestbewegungen jugendlicher Arbeiter im Dritten Reich, Eine Dokumentation*, Bund-Verlag, 3. Aufl., 1988, S. 16.
- 3) Arno Klönne, *Jugend im Dritten Reich, Die Hitler-Jugend und ihre Gegner*, Diederichs, Neuausg., 1982, S.237-238. 伊藤富雄氏による全訳が『立命館経営学』に分載されている(33巻1号, 1994年5月から)。
- 4) Wolfgang Breckheimer, Die Edelweißpiraten, in: *100 Jahre Historisches Museum Frankfurt am Main 1878 bis 1978*, II. Arbeiterjugendbewegung in Frankfurt 1904 bis 1945, S.195.
- 5) Jahnke & Buddrus, S.82.
- 6) H. フォッケ/U. ライマー著, 山本尤・鈴木直訳『ヒトラー政権下の日常生

活』社会思想社，1989年新装版，45頁。

- 7) Jahnke & Buddrus, S.457.
- 8) dito, S.69.
- 9) dito, S.101.
- 10) Arno Klönne, a.a.O., S.120.
- 11) Wolfgang Breckheimer, a.a.O., S.195-196.
- 12) 'Meuten und Piraten' in: *Der Spiegel*, 33.Jg. Nr.50, 1979, S.55.
- 13) Gerhart Werner, *Aufmachen! Gestapo! - Über den Widerstand in Wuppertal 1933-1945*, Peter Hammer, 1974, S.44.
- 14) dito, S.45.
- 15) Peukert, *Edelweißpiraten*, S.20-21.
- 16) dito, S.21.
- 17) Peukert, *Edelweißpiraten*, S.19-20.
- 18) 「ヒトラー・ユーゲント法施行規則」(1939年3月25日によれば，14歳から18歳までは「ヒトラー・ユーゲント」ないし「ドイツ少女同盟」所属となっていたが，満14歳になったものでもフォルクスシューレ卒業までは「ドイツ年少団」あるいは「年少少女同盟」に留まることになっていた。Jahnke & Buddrus, S.160.
- 19) Gerhart Werner, a.a.O., S.44.

史料 (Peukert, *Edelweißpiraten* に収録)

以下において，BK は Bundesarchiv Koblenz を，HD-G は Nordrhein-Westfälisches Hauptstaatsarchiv Düsseldorf, Gestapo-Personalakten を示す。コブレンツの関係史料は，現在は連邦文書館ポツダム支所所蔵。

- 1) Lagebericht der Stapo-Leitstelle Düsseldorf, 1943. BK-R22-1177, Bl.452-459.
- 2) Aus einem Bericht des Oberstaatsanwalts beim Kölner Oberlandesgericht an das Reichsjustizministerium vom 16.1.1944. BK-R22-1177, Bl.123-126.
- 4) Bericht eines Mülheimer HJ-Untersuchungsführers vom 7.7.1941. HD-G-9213, Bl. 42f.
- 10) Cliques-und Bandenbildung unter Jugendlichen. Denkschrift der Reichsjugendführung, September 1942, BK-R22-1177, Bl.325-395.
- 11) Aus den polizeilichen Vernehmungen des Josef M., Düsseldorf, 8. und 15.12.1942. HD-G-23599, Bl.88-96.

- 12) Aus einem Bericht der Gestapo Düsseldorf vom 10.12.1937. HD-G-10740.
- 13) Bericht eines Kölner Jugendrichters vom 7.11.1943. BK-R22-1177, Bl. 426-432.
- 14) Aus der Anklageschrift 4 KMS4/42 gegen Helmut S. u.a., Duisburg, 4.4.1942. HD-G-9213, Bl.210-218.
- 15) Vernehmung Fred R., Köln, 7.2.1944. HD-G-47515.
- 16) Polizeibericht, Wuppertal, 4.2.1943. HD-G-3692, Bl.334ff.
- 17) Brief der NSDAP-Duisburg an die Gestapo vom 8.10.1943. HD-G-37026, Bl.11.
- 18) HD-G-9206.
- 19) BK-R22-1177, Bl.320.
- 20) Bericht Gestapo Düsseldorf vom 4.2.1943. HD-G-47704.
- 21) Aus der Polizeilichen Vernehmung des Heinz E, 16.1.1943. HD-G-23599, Bl.130.
- 22) Bericht über eine Razzia des Düsseldorfer H.J.-Streifendienstes, 15.10. 1942. HD-G-23599, Bl.50.
- 23) HD-G-9213.
- 24) HD-G-3692.
- 25) Schreiben der NSDAP-Ortsgruppe Düsseldorf-Grafenberg an die Gestapo vom 17.7. 1943. HD-G-23599. Bl.154.
- 26) HD-G-3692.
- 27) HD-G-48897.
- 28) Brief der NSDAP-Düsseldorf an die Gestapo vom 11.5.1937. HD-G-35240, Bl.1.

Jugendliche Protestgruppe=Edelweißpiraten in der NS-Zeit — Über ihr äußeres Erscheinungsbild

Teruo TAKENAKA

Resümee

Die Edelweißpiraten, die der Hitlerjugend feindlich gegenüberstanden, hatten eigentlich ihre eigene Zwecke, in ihrer freien Zeit gemeinsam mit ihren Mitgliedern auf Wanderfahrt zu gehen, miteinander sich zu unterhalten und zu singen u.a. Aber diese Tätigkeiten waren damals als “Bündische” von der NS-Regierung verboten. Sie überfielen Hitlerjugend, weil die ihre Tätigkeiten verhinderten.

Die vorliegende Arbeit setzt es sich zum Ziel, das äußere Erscheinungsbild von Edelweißpiraten, ihre eigentliche Tätigkeiten und die sich aus den ständigen Konflikten mit der HJ entwickelnden Antinazismusbewegungen festzustellen.

Es ist sehr bedeutungsvoll, daß Edelweißpiraten in ihren Liedern u. a. viele ausländische, z.B. asiatische, russische oder englische Wörter benutzt, und damit die nationalsozialistische Idee von Volksgemeinschaft verweigert haben, und daß ihre Flugblätter und Lieder unmittelbar Hitler und NS-System heftig kritisiert haben.